

写真で見える立正大学の歴史



ごあいさつ

立正大学史料編纂室は、2014(平成26)年4月に開設されました。私たちは、本学の長い歴史と伝統を記した史資料を管理・保存し、またそれらを活用しながら、本学に関係する方々、そして本学にご興味をお持ちいただいている方々に対して、立正大学をより深くご理解いただき、さらには立正大学の良さをお伝えすることを大きな目標として掲げております。また、開校150周年を迎えます2022(平成34)年に『立正大学150年史』(仮称)を編纂することも大きな目標です。

本冊子は、2012(平成24)年に刊行されました『立正大学の140年』(立正大学140周年史)のなかから、本学の歴史における重要な出来事を選び出し、写真と短い解説を加えてコンパクトにまとめ、短い時間で本学の歴史をご理解いただける構成をとっております。本学に関係する学生、保護者、卒業生、教職員の皆さまに広くお読みいただければ幸いです。

平成27年3月

立正大学史料編纂室
室長 奥田 晴樹

目次

大学の沿革	1
建学の精神	2
I 建学から旧制大学まで	3
II 新制大学から文科系総合大学へ	7
III 「人間に関する総合大学」への新たな展開	13
歴代学長一覧	20

大学の沿革



▲本学の淵源である飯高檀林講堂（国指定重要文化財）

立正大学の淵源は、戦国時代の1580（天正8）年、教蔵院日生が学生の教育と仏教研鑽とを目的に日蓮宗の教育機関として、下総国飯高（現在の千葉県匝瑳市）に開設した飯高檀林に溯ります。明治時代になって檀林制度が廃止されたことに伴い、1872（明治5）年に現在の東京都港区高輪に日蓮宗小教院が設立されました。これが立正大学の起源となっています。

1903（明治36）年、日蓮宗臨時宗会にて教育制度の改革などが決定、現在の品川区・大崎の地に新校舎が完成したのを機に移転、翌年の「専門学校令」に基づいて「日蓮宗大学林」として開校しました。大学志願者が増大する社会情勢の中、1907（明治40）年には、名称および学則の変更が行なわれ、「日蓮宗大学」となりました。さらに、1919（大正8）年に施行された「大学令」に基づき、1924（大正13）年、文学部の予科と研究科からなる「立正大学」が設置されました。また日蓮宗大学は専門学校として存続し、翌年、「立正大学専門部」と改称されました。立正大学は日本で最も早く開設された旧制私立大学のひとつです。

第2次世界大戦後の1949（昭和24）年、新たに施行された「学校教育法」に基づき新制大学となった立正大学は、仏教学部と文学部の2学部をもって出発し、その後、1950（昭和25）年に経済学部、1967（昭和42）年に経営学部、1981（昭和56）年に法学部、1996（平成8）年に社会福祉学部、1998（平成10）年に地球環境科学部、2002（平成14）年には心理学部を開設し、現在8学部15学科7研究科からなる総合大学として、堅実な歩みを進めています。

建学の精神



▲建学の精神を刻むアショカピラー（品川キャンパス）

本学の建学の精神は、第16代学長である石橋湛山の命により、1961(昭和36)年に「立正精神委員会」(起草委員会)が組織されて、そこで明文化されたものです。建学の精神は以下の3つの誓いに表されています。

- 一、真実を求め至誠を捧げよう
- 一、正義を尊び邪悪を除こう
- 一、和平を願い人類に尽そう

日蓮聖人が真の仏教者として社会に貢献する生き方を実践できたのは、日本の柱・日本の眼目・日本の大船になるという若き日の誓願に基づくこの「三つの誓い」であったと、『開目抄』に表現されています。

本学に学ぶものは、この立正精神を体得し、時代に適応した知識と技術を修め、人類社会に寄与することを目標として欲しいと考えています。

建学から旧制大学まで

1580(天正8)年		日蓮宗の教育・研究機関として、下総国飯高郷（千葉県匝瑳市飯高）に飯高檀林を創設
1651(慶安4)年		飯高檀林、講堂を再建（現在、国指定重要文化財に指定）
1872(明治5)年	8月	日蓮宗の教育・研究機関として、日蓮宗小教院を東京芝二本榎（東京都港区高輪）の承教寺に設立（立正大学の開校の起点）
1873(明治6)年	6月頃	日蓮宗小教院を日蓮宗宗教院と改称
1874(明治7)年	4月	学祖・新居日薩、日蓮宗管長に就任
1875(明治8)年	5月 6月	二本榎承教寺の日蓮宗宗教院を日蓮宗大教院と改称 飯高檀林、廃止
1884(明治17)年	9月	大教院（東京二本榎）を大檀林と改称し、大檀支林を東京池上に設置。各地の中教院も檀林、小教院を宗学林とそれぞれ改称
1886(明治19)年	5月	大檀林に普通学科を設置、英語・数学・物理・化学等の教科を開設
1901(明治34)年	3月 10月	池上本門寺で火災、寺内設置の第1学区中檀林、第1教区小檀林を焼失 第1学区中檀林の移転地として、東京府下荏原郡大崎村谷山ヶ丘（現在の品川キャンパス所在地）に3,113坪の土地を購入
1903(明治36)年	6月 8月	大檀林と3中檀林を合併して大学林に。これに伴い、建築中の第1学区中檀林校舎を大学林に充当 大学林校舎（約600坪）、落成
1904(明治37)年	4月	日蓮宗大学林、文部省より専門学校令による認可を受け、谷山ヶ丘に設立 入学試験実施、142名の入学を許可
1907(明治40)年	4月	日蓮宗大学林、日蓮宗大学に名称変更
1916(大正5)年	3月 4～5月	本館教室より出火、教室棟・講堂・図書館・寄宿舎など合計9棟約850坪を焼失 日蓮宗宗会にて日蓮宗大学移転再築案が浮上、大学内で移転反対運動が勃発
1917(大正6)年	3月	大崎校舎再建工事着工、設計は辰野金吾氏
1918(大正7)年	6月	日蓮宗大学校舎落慶法要を挙行
1919(大正8)年	5月	「財団法人日蓮宗大学」へ改組
1920(大正9)年	3月	「日蓮宗大学教育基金壹百万人会」が設立
1922(大正11)年	12月	「壹百万人会」、大崎校地に隣接する1,519坪の土地を購入
1923(大正12)年	7月 9月	旧1号館（鉄筋コンクリート3階建）建築起工式を挙行（設計は隈石政太郎） 関東大震災（建築中の校舎への被害は軽微）
1924(大正13)年	4月 5月	新築校舎が完成。従来の校舎を中学校舎とし、大学部が新校舎へ移転 立正大学、大学令による設立認可（日蓮宗大学は専門学校として存続）。同時に財団法人日蓮宗大学は財団法人立正大学と改組
1925(大正14)年	4月	日蓮宗大学（専門学校）を立正大学専門部（夜間）と改称。宗教科、国語漢文科、歴史地理科の3科を設置 日蓮宗大学中学部、立正中学と改称し財団法人立正大学の経営に帰属
1926(大正15/昭和元年)	2月 4月	専門部国語漢文科、歴史地理科を併せて高等師範科に改変 立正大学図書館開館（鉄筋コンクリート3階建、150坪）
1927(昭和2)年	3月	立正大学第1回卒業生を輩出
1935(昭和10)年	4月	香風学寮、新築落成
1936(昭和11)年	2月	立正中学校舎より出火、中学校舎、大講堂を焼失
1937(昭和12)年	9月	立正中学、新校舎へ移転
1938(昭和13)年	4月	立正中学、中学校令により、立正中学校に改称
1941(昭和16)年	12月	戦時非常措置により繰り上げ卒業式、挙行
1944(昭和19)年	12月	学徒動員開始

建学期のあゆみ



▲1651(慶安4)年建立の飯高檀林講堂(重要文化財)

日蓮宗関東三大檀林一下総飯高檀林

戦国時代末から江戸時代初めにかけて、日本仏教の各宗では僧侶の学問研鑽を行う新たな檀林(=学校)が次々と開設されました。

「立正大学発祥之地」とされる飯高檀林は、日蓮宗の関東三大檀林のひとつで、1580(天正8)年下総国飯高郷(現在の千葉県匝瑳市飯高)に創設されました。

僧侶たちが学んだ一大学舎

檀林は修学課程と学事組織が制度化され、教育理念に基づいて運営されており、僧侶たちの新しい教育の場として定着しました。

飯高檀林は飯高寺の寺号で知られていますが、本来は妙雲山法輪寺と称しており、日蓮宗の教育・研究機関として最盛期には1,000人以上の学徒を擁する一大学舎でした。



▲飯高檀林総門(重要文化財)

立正大学発祥の地

境内の施設は、火災による焼失やその後の復元・再建を繰り返してきましたが、講堂・鐘楼・鼓楼・総門は国の重要文化財、境内全体と経蔵・題目堂・庫裏は千葉県の史蹟に指定されており、往時をしのばせています。

時代は明治に移り、日蓮宗の教育・研究機関として、1872(明治5)年に東京芝二本榎(現在の東京都港区高輪)の承教寺に日蓮宗小教院が設立されることとなりました。これが立正大学の開校の起点となっています。

◀1990(平成2)年に建立された「立正大学発祥之地」の石碑



開校から日蓮宗大学への道のり

立正大学開校の起点 一日蓮宗小教院

明治維新後、教導職制度制定ならびに神仏合併大教院設立とその解散といった流れを受けながら、日蓮宗の教育・研究機関も変革を遂げていきます。

承教寺に設立した小教院は、1875(明治8)年に大教院に改称。同年、飯高檀林は廃檀となりました。



▲日蓮宗小教院が開校された承教寺



▲境内に残る石碑



▲日蓮宗大学林設立当時の教職員 [1902(明治35)年頃]。
前列中央は初代学長の小林日董

日蓮宗大学林から日蓮宗大学へ

日蓮宗の教育制度刷新により、1904(明治37)年、日蓮宗大学林が東京府下荏原郡大崎村谷山ヶ丘(現在の立正大学品川キャンパス)に設立されることになりました。

日蓮宗大学林は、専門学校令に依って設立された専門学校としてスタートしましたが、1907(明治40)年には名称および学則の変更が行われ、日蓮宗大学と改称しました。

災禍からの再建

より一層の教育内容の充実を図るため、さまざまな改革が行われていた矢先の1916(大正5)年3月8日、出火により施設9棟、約850坪が焼失してしまいます。

日蓮宗が総力を結集して再建に取り組む中、篤信者であり東京駅や日本銀行などの設計者として著名な、辰野金吾氏に中等科校舎、講堂、寄宿舎の設計監督を依頼することになります。

1918(大正7)年6月9日の落慶記念の式典が盛大に執り行われました。



▲辰野金吾氏設計による講堂 [1917(大正6)年頃]

旧制大学への昇格から戦禍の大学へ



▲大崎校舎本館外観 [1924 (大正13) 年頃]

立正大学の設立

こうして新校舎、図書館、寄宿舍が次々と竣工し、大学令発布から実に6年の歳月を経た1924(大正13)年5月17日、立正大学の設立が認可され、新たな一步を踏み出すことになりました。

修学課程を研究科3カ年以上、学部3カ年以上、予科3カ年とし、文学部に宗教学、哲学、社会学、史学、文学の5学科が設置されました。

大学昇格への道のり

1919(大正8)年4月1日の大学令施行を受け、日蓮宗大学は大学昇格を目指すことになりました。

さまざまな困難を克服して、同年5月27日、財団法人日蓮宗大学が誕生しました。そして大学施設の整備や教育内容の充実を図るため、寺院・僧侶だけでなく檀信徒も含めた日蓮宗にゆかりの人々から協賛を得るために「日蓮宗大学教育基金壹百万人会」を設立。新たな土地を購入し、校舎等の施設の建設が行われます。



▲大崎校舎(現品川キャンパス)全景 [1926 (大正15) 年頃]

▼軍事演習の風景



戦時下の立正大学

昭和に入ると、校舎や講堂の修繕、学生控室や学生寮、柔剣道場が新築落成するなど学内設備がさらに充実していきます。

その一方で、1941(昭和16)年には太平洋戦争が勃発し、学校教育にさまざまな影響を及ぼすこととなります。立正大学でも同年12月、翌42(昭和17)年9月に繰り上げ卒業式が挙行され、学生たちは学業半ばで軍に召集されることになりました。

終戦を迎えた1945(昭和20)年9月、大学の講義は再開されますが、学生は兵役から帰らず、教授陣も疎開先からの転入が許されないという状況でした。

新制大学から文科系総合大学へ

part
II

1945(昭和20)年	5月	戦災のため、大学講堂・寮・中学校舎等を焼失
1949(昭和24)年	2月 3月	新制立正大学、設置認可。仏教学部(宗・仏)、文学部(哲・史・文・社)を設置 第II部に仏教学部(宗学科)、文学部(史・文・社・地)を設置
1950(昭和25)年	3月 12月	文学部英文学科(I・II部)を増設、経済学部(I・II部)を設置 立正大学短期大学部(宗教科・社会科・商経科、II部のみ)設置 大学令廃止により、旧制文学部を廃止
1951(昭和26)年	2月 3月 4月	財団法人立正大学、学校法人立正大学学園に改組 専門学校令廃止により、立正大学専門部、廃止 大学院文学研究科(仏教学・社会学・国文学・国史学の各専攻)修士課程を設置
1952(昭和27)年	12月	石橋湛山、第16代学長に就任
1955(昭和30)年	3月	大学院文学研究科(地理学専攻)修士課程を増設
1956(昭和31)年	3月 4月	大学院文学研究科(仏教学専攻)博士課程を増設 第1期鉄筋校舎(旧2号館)、竣工(昭和34年に増築)
1957(昭和32)年	1月 3月	石橋湛山学長、内閣総理大臣就任祝賀式を挙行 文学部第1部地理学科を増設
1963(昭和38)年	3月	大学院文学研究科(地理学専攻)博士課程を増設
1964(昭和39)年	5月	熊谷キャンパス開校工事開始
1965(昭和40)年	3月 10~11月	大学院文学研究科(英文学専攻)修士・博士課程を増設 大崎キャンパス正門および旧3号館竣工
1966(昭和41)年	3月 4月 9月	大崎キャンパス4号館、熊谷キャンパス1・2号館(短大A・B館)、竣工 短期大学部商経科、熊谷キャンパスに移設 大崎キャンパス学生会館、竣工
1967(昭和42)年	3月 4月	大学院文学研究科(哲学専攻)修士課程増設、経営学部経営学科(I部)を設置 熊谷キャンパスに教養部を設置(3号館・福利厚生棟・体育館・学生寮が竣工) 熊谷キャンパス第1回入学式挙行
1968(昭和43)年	3月 4月 9月	大学院文学研究科(社会学専攻)博士課程を増設 熊谷キャンパス本部棟、竣工 大崎キャンパス図書館(5号館)、竣工
1969(昭和44)年	3月	大学院文学研究科国史学専攻を改組、史学専攻修士課程を開設 熊谷校地に立正大学保育専門学校を設立
1970(昭和45)年	3月	短期大学部、熊谷へ全て移転
1977(昭和52)年	4月	大学院文学研究科(史学専攻)博士後期課程を増設
1979(昭和54)年	7月	熊谷キャンパス図書館が竣工
1980(昭和55)年	3月	八ヶ岳研修所、熊谷キャンパス実験棟が竣工
1981(昭和56)年	1月 3月 4月	法学部法学科(I部)を設置 熊谷キャンパス研究棟、竣工 日蓮宗宗立熊谷学寮、落成
1983(昭和58)年	1月	短期大学部社会福祉科(I・II部)、商経科(I部)、幼児教育科(I・II部)を設置
1984(昭和59)年	5月	チベットドラマ第14世法王が来校。講演会を開催
1985(昭和60)年	3月	熊谷キャンパス福利厚生棟(ステラ)、竣工
1986(昭和61)年	4月	文学部英文学科を文学部英米文学科と改称
1987(昭和62)年	11月	大崎キャンパス体育館・食堂・中高校舎竣工
1988(昭和63)年	4月	大学院経済学研究科経済学専攻修士課程を設置
1989 (昭和64/平成元年)	7月	「立正大・新疆大合同シルクロード踏査隊」壮行会を開催
1990(平成2)年	2月 5月 6月	東京ドームで入学試験を実施(以降3年間実施) 立正大学発祥地(飯高檀林跡)に記念碑を建立 大崎キャンパス現1・2号館竣工
1992(平成4)年	9月 10月	大崎キャンパス教室棟・石橋湛山記念講堂・福利厚生施設が竣工 開校120周年記念式典挙行、前英国首相サッチャー女史来校

II

戦後復興から新制大学へ



▲戦禍に遭った本館（左）と図書館（右）

戦禍の爪痕

1945(昭和20)年5月23日から翌24日にかけて米軍の空爆を受けました。立正大学は本館、図書館、そして竣工直後の旧制中学校本館が損傷を受けながらもかろうじて難をまぬがれましたが、他の木造建造物はすべて焼失しました。

慢性的なインフレ経済の状況下で、大学運営は困難を極めました。仮校舎の建設が始まり、復興後援会や振興会などが設立され、徐々に活気を取り戻していきます。

新制大学の設置に向けて

戦後、教育の民主化路線が敷かれ、新制中学校、新制高等学校の開設に引き続き、1949(昭和24)年度には新制大学の設置が定められることとなりました。

これを受けて、当時の新制立正高等学校教頭であった水野正遠氏は、「大学も新しい発展を期するべきである」とし、学科を増やして総合大学化を図ることを主張しています。



▲新制立正高等学校教頭の水野正遠による「新制立正大学設立に望む」
[立正大学新聞 1947(昭和22)年2月10日]



▲入試用のポスター

2学部7学科で学生募集開始

1949(昭和24)年、新制大学として認可を受けた立正大学は、仏教学部(宗学科、仏教学科)、文学部(哲学科、史学科、文学科、社会学科、地理学科)を設置し、学生を募集することになりました。

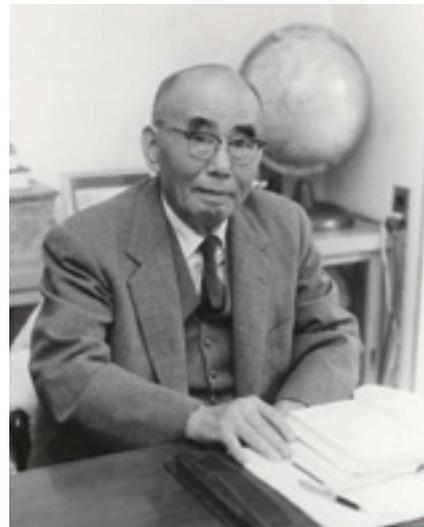
一方で水泳部、弁論部、児童文化研究部、立正短歌研究会など、学生によるクラブ活動も活発に行われるようになりました。

教学振興と「理想の大学」

第16代石橋湛山学長の就任

1952(昭和27)年12月1日、戦後復興を目指す大学の経営再建を切望され、石橋湛山氏が第16代学長に就任しました(のちに第55代内閣総理大臣に就任)。

石橋学長は、立正大学を「理想の大学」とする決意を内外に宣言するとともに、学内外で意欲的に活動を展開します。仏教系3大学(駒澤・大正・立正)学長会議の開催、「立正大学講演会」「立正文化講座」の開催をはじめ、名誉教授制度の新設、また事務系の機構についても再編・改組が行われました。



▲第16代学長の石橋湛山



▲「理想の大学」を発表した石橋湛山学長
[立正大学学園新聞 1953(昭和28)年]

施設の充実と教学の振興

1954(昭和29)年には日蓮宗大学林の設置から半世紀を迎え、立正大学創立50周年の記念行事が盛大に執り行われ、待望の体育館兼食堂が完成。また、昭和40年代には正門、4号館、学生会館、図書館などが相次いで竣工しました。

教学面では、文学部第I部への地理学科の増設認可により6学科編成が完成するとともに、日蓮教学研究所、経済学研究所に続いて、人文科学研究所、産業経営研究所が相次いで設置されました。



▲峰原坂に竣工した正門 [1965(昭和40)年]



▲立正大学創立50周年記念講演：辰野隆東京大学名誉教授の「人生と演劇」
[1954(昭和29)年]

熊谷キャンパスの誕生



▲買収した建設用地(埼玉県熊谷市)

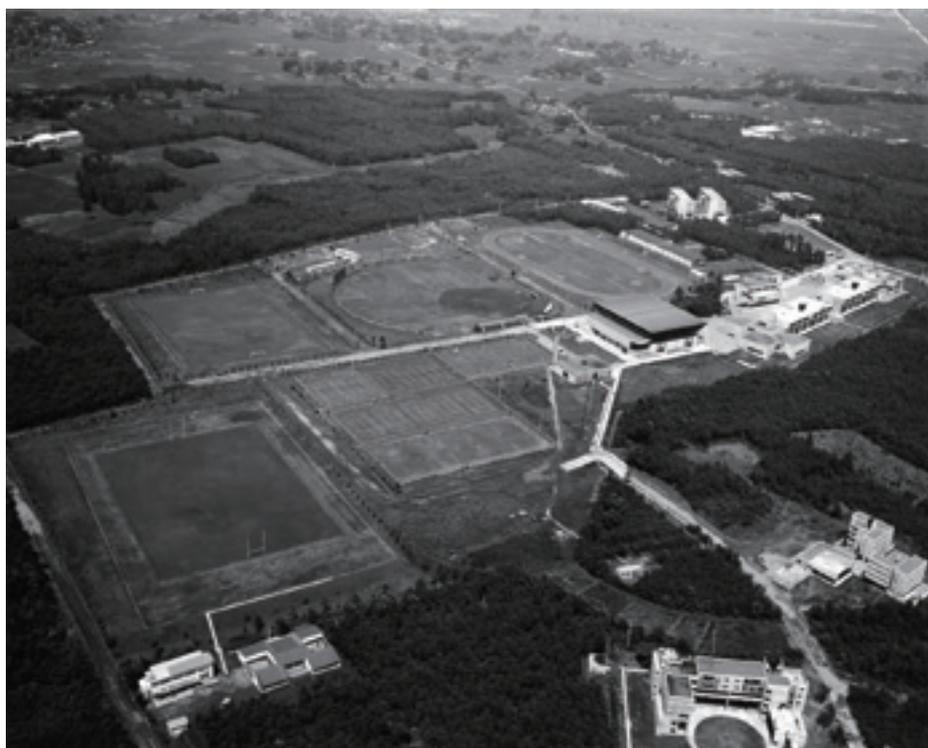
新キャンパス用地の取得

戦後のインフレによる人件費、施設・設備等の物件費の高騰により、私立大学の財政は、窮乏・苦悩の連続でした。また1960(昭和35)年前後、1970(昭和45)年前後の学生運動も大きな打撃となりました。

立正大学もまた困難な経営を強いられていましたが、この状況から脱却するため、1964(昭和39)年埼玉県熊谷市に新たなキャンパス用地を取得することを決定しました。

熊谷キャンパス建設に着手

1965(昭和40)年、「立正大学熊谷教養部創設事務局」が現地に開設され、翌年にはキャンパス予定地の見学会が行われました。12万坪にも及ぶ広大な敷地は、畑と水田が約2割、ほかは雑木林で小さな川が流れる丘陵地でした。



▲1966(昭和41)年頃の熊谷キャンパス全景



▲(左) 体育館、(中央) 本部棟、(右) 福利厚生棟



▲1967 (昭和42) 年頃の熊谷キャンパス

キャンパスの設計コンセプト

立正大学熊谷キャンパスの第2期・第3期工事を設計したのは、当時、新進気鋭の建築家として知られた槇文彦氏によります。

その設計コンセプトは、①美しい自然環境を十分に保存すると同時に豊かな集合性を建築空間に求める、②キャンパスがつねにひとつのまとまった形をもつ、③新しい教育の場として、全学生教職員の生活に全体的に対応するひとつの小都市でした。

槇氏はこの設計で第10回毎日芸術賞・建築賞を受賞しました。

凄烈な学園紛争を越えて

1968 (昭和43)～70 (昭和45) 年当時、立正大学は熊谷校舎の新設や大崎校舎の増改築を含め、さまざまな問題を抱えていました。

同時期に全国的に広がっていた学生運動の火種は政治的な問題をも内包しており、立正大学でも学生自治会の問題に端を発生し、大学主催の全学集会 (学生のいわゆる大衆団交) が開かれますが、対立は一層激しくなります。ついには学生による教室のバリケード封鎖、不法占拠、デモなどへと発展していきました。

また、熊谷では学生による入学式阻止集会の開催、大学によるサークルボックスの閉鎖など、大学全体が不穏な空気に包まれていました。

しかし1977 (昭和52) 年以降、良識ある学生らの努力によって、ようやくキャンパスの正常化に向けて明るい兆しが見え始めたのです。

▼当時の大崎キャンパス学生会館



文科系総合大学への発展



▲熊谷キャンパス福利厚生棟「ステラ」

大学知名度の高まり

1975(昭和50)年になると大学紛争も次第に沈静化し、立正大学も財政危機を乗り越え、その成果が現れつつありました。教学面では入学定員増が認可され、また1981(昭和56)年には念願の法学部が設置認可されました。

さらに石橋湛山名誉学長を記念した「石橋湛山記念基金」も創設され、全国の高校生を対象とする懸賞論文の募集が開始されるなど、大学の知名度は高まってきました。

教育・研究環境の整備

入学定員増の認可後は教育・研究環境の整備が最重要課題となり、下田、八ヶ岳、軽井沢に研修所が開設され、教職員や学生の利用に供することとなりました。

熊谷キャンパスでは新図書館に続き、教養部実験棟・研究棟、福利厚生棟や学生寮が完成。武蔵野の緑の中に美しい熊谷キャンパスがその全容を現しました。

大崎キャンパスの再開発

大崎キャンパス(現品川キャンパス)では再開発計画に基づいて着々と工事が進められました。狭隘な敷地であることからスクラップアンドビルド方式を採用し、3期の工期を経て1992(平成4)年に完成しました。

再開発に伴う校舎の新築と志願者増加に対応するため、1990(平成2)年からの3年間は東京ドームで入学試験を実施。同施設が入試会場として使われたのは初めてで、話題を呼びました。



▶東京ドーム入試の様子



▲1992(平成4)年完成の大崎キャンパス教室棟(現品川キャンパス3号館)



「人間に関する総合大学」への 新たな展開



1993(平成5)年	4月	大学院文学研究科国文学専攻博士後期課程を増設
1994(平成6)年	4月	仏教学部(宗)、文学部(史・国文・英米・社・地)、経済学部、夜間主コース設置 大学院経済学研究科経済学専攻博士後期課程を増設 大学院法学研究科法学専攻修士課程を設置 熊谷キャンパスE館(現9号館)・サークルボックス、竣工
1995(平成7)年	3月 4月	教養部を廃止 仏教学部仏教学科、文学部哲学科、経営学部経営学科、夜間主コース設置 大学院文学研究科哲学専攻博士後期課程を増設
1996(平成8)年	3～4月 4月 7月	熊谷ユニテンスA館(B館は11月完成)、学生食堂パドマ竣工 社会福祉学部(社会福祉学科・人間福祉学科)を設置 大崎キャンパス10号館(中高)、竣工
1997(平成9)年	12月	熊谷キャンパス3号館(地球環境科学部棟)、竣工
1998(平成10)年	1月 4月	大学入試センター試験に参加 地球環境科学部(環境システム学科・地理学科)を設置 大学院経営学研究科修士課程を設置
1999(平成11)年	3月 4月	短期大学部改組完了 国際交流センターを開設
2000(平成12)年	4月	大学院社会福祉学研究科修士課程、大学院地球環境科学研究科を設置
2001(平成13)年	4月	社会福祉学部、ボランティア活動推進センターを開設
2002(平成14)年	4月	心理学部を設置。文学部文学科を設置(国文学科、英米文学科を統合) 第II部(夜間)を廃止。経済学部・経営学部を大崎4年一貫化 立正大学博物館開館。入試・キャリアサポート・カウンセリングの各センターを開設
2003(平成15)年	4月	仏教学部(昼)のコース名称を変更(「仏教思想歴史専攻」「仏教文化専攻」) カウンセリングセンターを「心理臨床センター」と名称変更
2004(平成16)年	1月 4月	大崎総合学術情報センター(11号館)が竣工(4月に情報メディアセンター開設) 大学院心理学研究科を設置 経営学部昼夜開講制をAコース・Bコースに改称
2005(平成17)年	12月	産学官連携推進センター開設(平成23年4月～研究推進・地域連携センター)
2006(平成18)年	1月 4月	大崎キャンパス9号館(中・高校舎および大学教室)が竣工 文学部、大崎校舎にて4年間一貫教育開始 大崎キャンパス12号館(学生厚生棟)竣工
2007(平成19)年	1月 4月	大崎キャンパス5・6号館のリモデリング工事が完了 仏教学部、大崎校舎にて4年間一貫教育開始
2008(平成20)年	4月	大学院社会福祉学研究科社会福祉学専攻博士後期課程を設置
2009(平成21)年	3月 10月 11月	熊谷キャンパスのアカデミックキューブ・スポーツキューブ竣工 硬式野球部、東都大学秋季リーグI部初優勝 硬式野球部、第40回記念明治神宮大会初優勝
2010(平成22)年	3～6月	熊谷キャンパスのゲートプラザ・水景池・外溝工事竣工
2011(平成23)年	3月 4月	熊谷7号館(子育て支援施設)・26号館(サッカー部寮)改修工事竣工 心理学部、対人・社会心理学科を設置
2012(平成24)年	4月 10月	大学院心理学研究科対人・社会心理学専攻修士課程を設置 社会福祉学部人間福祉学科を子ども教育福祉学科に名称変更 開校140周年記念シンポジウムを開催
2013(平成25)年	4月	立正中学校・高等学校馬込キャンパス(大田区西馬込)へ移転
2014(平成26)年	4月	「大崎キャンパス」を「品川キャンパス」へ名称変更。立正大学史料編纂室を開設

学部・短大の再編と拡充

大綱化と教養部の解体

1991(平成3)年、大学設置基準が改正され、一般教育と専門教育の区分、一般教育内の科目区分が廃止されました。これにより、1967(昭和42)年に熊谷に設置された「立正大学教養部」はさまざまな議論を生みながらも、1994(平成6)年度末をもって廃止されました。



▲1999(平成11)年2月完成
短期大学改組記念モニュメント



▲教養部刊行物『LOTUS(ロータス)』

短期大学の改組から社会福祉学部の開設へ

1983(昭和58)年には商経科、社会福祉科、幼児教育科の3科からなる総合短期大学部が熊谷キャンパスに開設されました。これが現在の「社会福祉学部」の前身となります。1995(平成7)年、短期大学部社会福祉科と幼児教育科は、社会福祉学部として生まれ変わりました。



▲社会福祉学部、実習指導室・特殊教室のある4・5号館



◀1997(平成9)年12月20日
「埼玉新聞」朝刊記事

理系学部の誕生

地球環境科学部は文学部地理学科を前身とし、1998(平成10)年、熊谷キャンパスに開設されました。これにより立正大学は理系学部を擁する総合大学として発展を遂げます。

時代の先を読んだ心理学部の開設

2002(平成14)年、首都圏で最初の心理学部が開設されました。当時「心理学部」という名称は珍しく、日本の大学の中では3番目でした。2011(平成23)年には、臨床心理学科に加えて対人・社会心理学科が開設されました。



▲2002(平成14)年1月 心理学部開設記念シンポジウムの様子

施設の充実

立正大学開校 130 周年記念事業計画

2002（平成 14）年に「立正大学開校 130 周年記念事業計画」の一環として、総合学術情報センター（11 号館）の建設が決定、2004（平成 16）年に竣工されました。山手通りに直結した総合学術情報センターは、図書館をはじめ、学術研究と学術情報発信の拠点となる施設です。本学の知的財産を社会に還元するシンボルタワーとして、幅広く活用されています。



▲総合学術情報センター（11号館）

旧 9 号館は、中学・高校教室の老朽化により、「大崎キャンパス再構築マスタープラン」（2002年）のもとに建て替えが計画されました。2006（平成18）年に完成した新 9 号館は、地上部を中学・高校の設備として、地下部を大学の教室として使用できるように改築。建物外部は壁面緑化を採用することにより、緑と潤いのある街並景観を形成し、のびやかに生活できるキャンパス空間となっています。中学・高校の移転により、現在はすべて大学が使用しています。



▲新 9 号館

熊谷キャンパス再開発事業

2007（平成19）年 5 月より「熊谷キャンパス再開発事業」が着手されました。「学び」「環境」「健康」「憩い」「社会」の 5 つのコンセプトをもとに豊かな自然・資源のブランドイメージを生かした大規模な工事となりました。

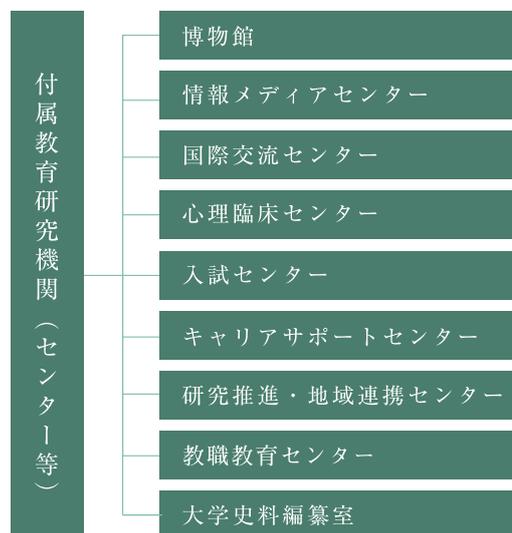


▲アカデミックキューブ（19号館）

2009（平成21）年、熊谷キャンパスに建設されたアカデミックキューブ（19号館）は環境に配慮した最新の技術を数多く採り入れ、屋根には太陽光発電システムを設備。自然エネルギーを利用することで、学生・教職員への環境保全・省エネルギーへの意識向上に繋がっています。再開発された熊谷キャンパスは、財団法人日本産業デザイン振興会・主催「2011年度グッドデザイン賞」（G マーク）を受賞しました。

組織化戦略

センター構想とセンター化



▲付属教育研究機関（センター）一覧

長期的な展望に基づく支援業務の継続性や、学生の要望に迅速に 대응していくため、現在ではセンター制がとられています。

センター制の意義は、自立的な意思決定と、管理運営の独立性、業務の戦略的事業展開を可能にすることにあります。各組織は、業務を統括するセンター長と、主として学部を母体に出され、政策立案・執行・評価に関する業務を決定する運営委員会から成り立っています。

2015（平成27）年現在、9つのセンターが開設され、それぞれ教育支援機能を担っています。



▲2014（平成25）年度キャリアサポートセンター主催就職ガイダンスの様子

キャリアサポートセンターは、入学時から卒業後の職業を意識したキャリア開発を支援する業務を担う戦略的組織として2002（平成14）年に開設されました。正課授業として設置されている「キャリア開発基礎講座」や「インターンシップ」、「スキル開発」、キャリアカウンセラーの配置など、総合的なサポートを行っています。

また、同年に開設された入試センターは、入試関連全般の統括的業務を行う組織です。入試イベントとして年間12回開かれる「オープンキャンパス」や、日本全国各地で開催している「進学相談会」など、立正大学への進学を考えている方への全面的なサポートも重要な業務のひとつです。



▲入試センター刊行物
(左 昭和42年度大学案内、中 昭和63年度版『ARCH』第1号、右 同平成28年度版)

校友会・課外活動（強化クラブの活躍）



▲校友会開設式典

校友会の活動

立正大学では、2009（平成21）年に「立正大学校友会」が発足。それまで外郭団体として活動していた、学部・大学院の卒業生・修了生による「立正大学同窓会」、短期大学部・保育専門学校卒業生による「立正大学短期大学部・保育専門学校同窓会」、郵政関係の在校生・卒業生による「立正大学郵政会」、在校生のご父母による「立正大学橘会」を統合したもので、在校生、卒業生（大学・大学院・短期大学部・保育専門学校）、保護者、教職員を会員としています。

課外活動（強化クラブの活躍）

立正大学強化クラブは、学生に最も親しまれているスポーツを振興することによって、学生の愛校心を高め、学園生活をより豊かにすることを目的としています。対象クラブは硬式野球部、サッカー部、ラグビー部です。



▲試合風景（サッカー）

硬式野球部は東都大学野球連盟に所属し、2009（平成21）年度秋季リーグで初優勝、明治神宮野球大会においても初優勝し日本一となりました。



▲第40回記念明治神宮野球大会優勝記念写真



▲初の1部昇格を決めた試合
（ラグビー部 2004（平成16）年）

ラグビー部女子部員も活躍中です。2014（平成26）年に、産学連携で女子7人制ラグビーチームを育成するNPO法人「ARUKAS KUMAGAYA（アルカス熊谷）」が誕生しました。熊谷市および地域の企業と立正大学が連携して支援。世界で活躍できる選手の育成を目指し、歩み出しています。



◀2014（平成26）年、本学と東京学芸大学の合同チームが「大学女子7人制交流大会」において、6戦全勝し、初代女王に輝きました。

震災を経て、品川キャンパスへ

東日本大震災時の立正大学

2011（平成23）年3月11日、未曾有の被害をもたらした東日本大震災。立正大学では同年4月下旬～5月上旬にかけて、さらに夏期休暇にも学生や教職有志がボランティア活動のため被災地に入りました。



▲気仙沼災害ボランティア活動の様子



▲立正大学グリークラブと米国イェール大学による東日本大震災復興チャリティーコンサート



立正中学校・高等学校、馬込へ移転

100余年に及ぶ歴史と伝統をもつ立正大学付属立正中学校・高等学校が、長く発展してきた大崎の地から、2013（平成25）年4月に大田区西馬込に移転しました。新キャンパス（馬込キャンパス）は日蓮宗の大本山でもある池上本門寺にも近く、歴史的・文化的な風土豊かな地域です。

◀2013（平成25）年開校の馬込キャンパス

2014年、大崎キャンパスから品川キャンパスへ名称変更

2014（平成26）年4月、立正大学が芝二本榎から現在の品川区にキャンパスを移してから110年目を迎えたこの年、立正大学大崎キャンパスは「品川キャンパス」へと名称を変更しました。なお、これと同時に法学部および法学研究科が熊谷から同キャンパスへ移転。社会科学系3学部（経済・経営・法）がひとつのキャンパスに集結しました。

キャンパスの名称変更は、歴史や文化、交通、国際、ビジネスの「交差点」および「フロンティア」として多様な可能性を有する、品川区との連携・強力をより一層高めることを目的としています。



▲品川キャンパス山手通り口（総合学術情報センター前）

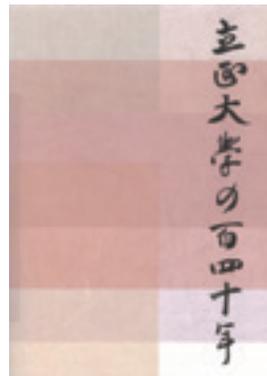
立正大学史料編纂室の開設

開校 140 周年記念事業

2012 (平成24)年に立正大学は開校140周年を迎えました。これを記念して、国際シンポジウムや公開講座、企画展などさまざまなイベントが行われました。その一環として石橋湛山記念講堂にて開催された特別展「石橋湛山と立正大学」(10月1日～31日)は、多くの方々に立正大学の歴史を知っていただく貴重な機会となりました。



▲開校140周年記念特別展「石橋湛山と立正大学」の様子



▲2012(平成24)年12月発行『立正大学の140年』

史料編纂室の開設と活動内容



▲2014(平成26)年オープンキャンパスにて開催、写真展「りっしょう物語—写真と史料でふりかえる立正大学」展示の様子

2012(平成24)年に刊行した140周年記念誌『立正大学の140年』の編纂をふまえ、2014(平成26)年4月に「立正大学史料編纂室」が開設されました。

史料編纂室では、大学の貴重な記録を残すべく、史料の収集・整理・保存・管理を行うとともに、大学史の編纂に取り組んでいます。

また、長い歴史と伝統を有する立正大学の良さをより多くの方々にお伝えしていくことも私たちの重要な使命であるにとらえ、大学史の調査・研究を進め、大学アーカイブズの充実を目指しています。



▲平成26年度、創刊号発行『立正大学史料編纂室の葉』(ニューズレター)



▲「モラリすと学ぼう 立正大学の歴史」(学校紹介リーフレット)



▲収集された史料の一部

歴代学長



学祖 新居日薩



初代学長 小林日董



第2代学長 小泉日慈



第3代学長 本間海解



第4代学長 脇田堯惇



第5代学長 久保田日遥



第6代学長 杉田日布



第7代学長 風間隨学



第8・11代学長
清水龍山



第9代学長 望月日謙



第10代学長 関本龍門



第12代学長 守屋貫教



第13代学長 井村日咸



第14代学長 望月歆厚



第15代学長 飯沼龍遠



第16代学長 石橋湛山



第17代学長 坂本日深



第18・19・20・21代学長
菅谷正貫



第22代学長 中村瑞隆



第23・25代学長
渡邊寶陽



第24代学長 大澤正男



第26代学長 古西信夫



第27代学長 坂詰秀一



第28代学長 吉田榮夫



第29・30代学長
高村弘毅



第31・32代学長
山崎和海

写真で見る立正大学の歴史

発行日：2015年5月25日

第2刷：2015年6月25日

編集発行：立正大学史料編纂室

〒141-8602 東京都品川区大崎4-2-16

TEL.03-3492-2690

FAX.03-5487-3339

© 立正大学史料編纂室



立正大学史料編纂室